料理人

岸田理生

プロローグ

空中には、数十枚の、大小さまざまな銀の皿が吊られ、照明の光を射返している。
月夜に、海月たちが浮遊する海の底のようにも、月が増殖した地上の廃墟のようにも見える。
そこに、かがみこんで、両腕を内側から両膝のうしろにまわし、両足の甲に、手首を乗せた形の、空腹者たちの群れが一人また一人と現われてくる。
彼等の掌には、さまざまな食物がある。空腹者たちは、しばらく無言でうろつきまわっているが、やがて、

全員　あ。

と叫ぶ。すると、

男1　アンパン。
全員　い。
女1　イチゴ。
全員　う。
男2　梅干。
全員　え。
女2　枝豆
全員　お。
男3　オレンジ。
全員　か。
女3　牡蠣。
全員　き。
男4　きなこ。
全員　く。
女4　栗
全員　け。
男5　毛蟹。

全員　こ。
女5　米。
全員　さ。
男6　刺身。
全員　し。
女6　椎茸。
全員　す。
男7　寿司。
全員　せ。
女7　セロリ。
全員　そ。
男8　蕎麦。
全員　た。
女8　筍。
全員　ち。
男1　粽。
全員　つ。
女9　漬物。
全員　て。
男2　天丼。
全員　と。
女1　鳥肉。
全員　な。
男3　納豆。
全員　に。
女2　肉。
全員　ぬ。
男4　ぬかみそ。
全員　ね。
女3　葱。
全員　の。
男5　海苔。
全員　は。
女4　白菜。
全員　ひ。
男6　干物。

全員　ふ。
女5　福神漬。
全員　へ。
男7　蛇。
全員　ほ。
女6　菠薐草。
全員　ま。
男8　マグロ。
全員　み。
女7　みかん。
全員　む。
男1　麦。
全員　め。
女8　目刺し。
全員　も。
男2　もやし。
全員　や。
女9　焼ソバ。
全員　ゆ。
男3　百合根。
全員　よ。
女1　羊羹。
全員　ら。
男4　ラーメン。
全員　り。
女2　りんご。
全員　る。
男5　ルイベ。
全員　れ。
女3　蓮根。
全員　ろ。
男6　ロースト・ビーフ。
全員　わ。
女4　ワカメ。

不意にサイレンが鳴る。

空腹者たち、慌てて奇形的な形のまま逃げ去り、男1・2・3・4と女1の五人が残る。
五人は、体をのばして立上ると腰に下げていた袋に、手にしていた食べ物をしまい、話しはじめる。

1

男1　男1、テーブルを運んで来ながら、自信ありげに、
男1　猫、です。
男2　断言する。
男2　男1と共にテーブルを運んで来ながら、自信なげに、
男2　人……だと聞きましたが……。
男3　男3、椅子を二つ運びながら、自信ありげに、
男3　人、です。
男4　断言する。
男4　男4、椅子を二つ運びながら、自信なげに、
男4　猫……だと聞きましたが。
男1　男1、テーブルを所定の位置に置きながら、自信ありげに、
男1　猫、です。
男2　断言する。
男2　男2、男1と共にテーブルを置きながら、自信なげに、
男2　人……だと聞きましたが……。
男3　男3、椅子を置きながら、自信ありげに、

男3　人、です。

断言する。

男4、椅子を置きながら、自信なげに、

男4　猫……だと聞きましたが……。

男1、椅子に座りながら、自信ありげに、

男1　猫、です。

男2、椅子に座りながら、自信なげに、

男2　人……だと聞きましたが……。

男3、椅子に座りながら、自信ありげに、

男3　人、です。

男4、椅子に座りながら、自信なげに、

男4　猫……だと聞きましたが……。

と、その間に自分専用の車椅子を運んできて座っていた女1が、

女1　象よ。

男たち　象？

男たち、揃って女を見る。

女1　象よ。

平然としている。

男4　ゾーッ。

男1・2・3、明らかに馬鹿にして男4を見る。男4、ヘッヘッと笑ってごまかす。
女1、無関心に。

女1　象だったのよ。象だったわ。象は鼻ね。象の、鼻……。

うっとりする。

男たち　象の鼻。
男1　長い。
男2　太い。
男3　重い。

男4、しばらく考えこんでいるが、突然

男4　象さん　象さん
お鼻が長いのね
そうよ　母さんも
長いのよ

と、歌う。

男1　話を戻しませんか。
男2　私は、人……だと聞きました。
男3　人、です。
男4　猫……だと聞きましたが。
男1　猫、です。名前はブンザエモンと言いました。ブンザエモンなぞと言う名前の人間が今時存在すると思いますか？　猫ですよ、当然。

男4、拍手する。

男3　しかし、ですよ。猫を××たりしますか？
男1　します。
男2　あんた××たんですか？
男1　私は××てませんよ。だが、聞いたことはある。それに、人間を××たりしたら、これはもう、大変なことだ。

男4　犯罪です。××なくたっても、犯罪だ。生きたまま××る、という訳にはいかんでしょう。まず、殺さなくちゃならん。

男2　私は昔、生きたままの海老を××たことがありますよ。それから、生きたままの白魚も×××ました。

男1　白魚は、（と、指で大きさを示し）こんなもんでしょう。海老は、この位だ。しかし人間は、こんなだ。それを生きたまま××たりしませんよ。

男3　赤ん坊だったら、どうです？

男4　赤ん坊なら、可能でしょう。

男2　しかし、赤ん坊を生きたまま××るというのは、私、趣味じゃないですね。

男1　あんたの趣味を聞いてやしません。話題は××られたのは、人か猫か、ということですよ。

女1、いきなり、

女1　象よ。象だったのよ。象は、鼻ね。象の鼻……。私、象の鼻を、

男2、猛スピードで立上ると、女1の口を手でふさぎ、しばらくして放す。

女1　たことがあるわ。

男2　……間に合った。

女1　象の鼻は、

男2、また慌てて女1の口をふさぎ、放す。

女1　かったわ。その、

男2、女1の口をふさぎ、放す。

女1　は、そうね、夢に似ていた。はっきりと覚えている夢よ。私、時々、夢を見るわ。象の鼻を、

男2、女1の口をふさぎ、放す。

女1　ている夢よ。目覚めるとよみがえってくるわ……。

男2、女1の口をふさぎ、放す。

女1　私、象の鼻を、

男2、女1の口をふさぎ、放す。

女1　たくて、

男2、女1の口をふさぎ、放す。

女1　たくて、

男2、女1の口をふさぎ、放す。

女1　たくて、探したわ。でも、どこにもない。私、今でも、

男2、女1の口をふさぎ、放す。

女1　たいわ。象の鼻……、象の鼻…。

男2　（男1に）すいませんが、私、口をふさいでいますから、あんた、車椅子を押してくれませんか。このまま放っておくと、保健所がくる。

男1　いいですよ。（立上る）

男2　方法は、あるんです。黙らせる方法は、ね。

男1　（車椅子を押しながら）どうするんです？

男2　象の鼻を××させるんです。

男1　象の鼻を××させる？

男2　勿論、生きちゃいません。匂いも××もない。ニセモノです。私は、五年越し、彼女に、象の鼻を××させてきました。ホラホラ、象の鼻だよ。……るんだよ、とね。

男1、2、女1、去り、男3、4が残る。

2

男3、ズボンのポケットから、一冊のボロボロの書物を取り出し、

小声で、

男３　やりますか？

男４　あたりを警戒しながら、ゴクリと唾を飲み込み、

男４　やりましょう。

男３　あんたから、どうぞ。

男４　（嬉し気に）そうですか？

男３　お先にどうぞ。

男４　それじゃあ、失礼して。

テーブルに上ると、身構える。

男３　行きますよ。

男４　ええ。

二人、緊張している。

男３、書物を読みはじめる。

男３　「オスタンドの牡蠣が迎ばれてきた。可愛く丸々としている。貝殻の中へ入れた小さな人間の耳そっくりで、塩辛ボンボンといった格好で舌と口蓋の間でとろりと溶ける」

男３が舌舐ずりの気配で読む間、男４は舌を鳴らし、歯を鳴らし、全身を痙攣させて酔っている。

男３　ギィ・ド・バッサン『ベラミ』杉捷夫訳です。

男４、アゥアゥと意味不明の声を挙げ、

男４　いやあ、オットセイになりました。満腹、という奴です。いただきました。

腹をさする。

男３、笑顔になり、

男３　お粗末さまでした。
男４　それじゃ、今度は私が。
男３　そうですか。では失礼して。

男３、男４に書物を渡してテーブルに上る。男４はテーブルを下り、

男４　「食の饐して餲せると魚の餒れて肉の敗れたるは食らわず。色の悪しきは食らわず。飪を失えるは食らわず。時ならざるは食らわず。割正しからざれば食らわず。其の醤を得ざれば食らわず」（読む）。

男３、テーブル上で何とか酔おうと努めるができず、白けている。

男４　（得意気に）「論語」です。
男３　申し訳ないんですがね。
男４　なんでしょう。
男３　私、余り頭がよくないものですから。
男４　それで？
男３　胃も丈夫じゃないもんですから。
男４　ええ、それで？
男３　もう少し、やわらかいもんを喰わせて貰えると、ありがたいんですが。

男４、じろりと男３を見る。

男３　ひとつ、そこのところを、よろしく。

男４、頁を繰り、

男４　行きますよ。
男３　はい（身構える）。
男４　「つぎの盆は期待していたような大きさではなかったけれども、その奇妙な形がぼくらの目を一斉にひいた。行動十二宮をかたどった円い皿がぐるりと並べられて、それぞれの星座に適応する料理が配膳人の手によってもられていた」（読む）。

男４、男３を見て、ニタッと笑う。
おあずけを喰った犬のポーズで待っていた男３、ハッハッと息を荒げて待

つ。

男４　男４、急に早口の大声で、熱っぽく、

「すなわち、白羊宮の上には豌豆で作った雄羊の頭、金牛宮には一片の牛肉、双子宮にはアフリカのいちじく、処女宮にはまだ子を生まぬ牝豚の腹、天秤宮には片方にタルトを、他方に菓子を乗せた天秤を、天蠍宮には海の伊勢蝦、射手宮には野兎、磨羯宮には山羊の角、宝瓶宮には鵞鳥、双魚宮には二尾の鰡がのせられていた」（読む）。

男３　男３、しきりと味わおうとして頑張っているが、途中であきらめ、フテ寝してしまう。

男４　男４は読み終り、大きく息を吐いて満足気に、

男４　ペトローニュース『サチェリコン』です。お代りは？

男３　男３、ふてくされて返事もしない。

男４　お気に召さない？

男３　（急に跳ね起き）召すも召さないも、私は一口だって食えませんでしたよ。いいですか？　私は飢えているんだ。食いたいんです。単純を喰いたいんですよ。

男４　男４、突然、叫ぶ。

男４　目に青葉山ほととぎす初がつを。

男３　ああ、初がつを。

男４　と、のたうつ。

男３　あたたかき鰻を食ひてかへりくる道玄坂に月押し照れり、斎藤茂吉。

男４　ああ、鰻。

男３　と、のたうつ。

男４　梅若菜鞠子の宿のとろろ汁、松尾芭蕉。

男３　とろろ、とろろ。

と、のたうつ。
しばらくして、満腹の溜息を洩らし、

男３　いやあ、御馳走さまでした。

テーブルを降りる。

男３　最初はどうなることかと思いましたが、満腹です。
男４　あんたも、しかし、偏食ですな。
男３　私、肉が駄目でしてね。
男４　ふしあわせだ。
男３　それと、ニンジン。
男４　ニンジンは私も駄目です。

男３、４、テーブルと椅子を片付けながら、

男３　デザートと行きますか？
男４　結構ですな。
男３　おたくは何を？
男４　私、桜餅なぞをひとつ。
男３　桜餅？いいですな。……行きますよ。

男３、暗唱する。

男３　「お八つに出る、ほのかに塩味のしみこんだ桜の葉で巻かれた桜餅の淡い桃色の皮には、どこか透明な層があって、その中に気泡のようなものが見えることがありました。子供の私には、白磁の皿の上に置いた桜餅が、花吹雪のなかを通って連れてこられた、ほんのり色づいた優雅な婦人のように見えて、すぐ食べる気にはならなかったのです」。

男３は、片付けているが、男４は口をぽかんとあけて、うっとりと棒立ちになっている。

男４　いやあ、なかなか。……あんたは、何を？
男３　私ですか？　私は、軽く、お茶なぞを。

男４　それじゃ行きますよ。
男３　ええ。

男４、暗唱する。

男４　「これやこの銘茶の若芽、春風のもとに生い育ち、摘まず取らずにほったらかされ、葉っぱばかりが伸び放題、それでも煮詰めりゃたいした色つや、世にも稀なる乙なもの」

男３、うっとりしている。
男４、片付け終る。

男３　お茶はいいですなあ。
男４　私、どっちかと言うとコーヒー党でしてね。

言いながら去る。

３

無人となった舞台に女３、女５、男５、男８が現われる。女３は、男８の首からのびる鎖の端を、女５は、男５の首からのびる鎖の端を持ち、男５、男８は上半身裸で、目隠しをされ、首輪をつけられ、両手足、両足首は鎖錠され、四つん這いになっている。

女３　（凄まじい早口で）さっさと歩くのよ、薄のろの豚肉。まったくイライラする。あんたは臭い。ブロイラーの匂いがプンプンするわ。いつもスーパーマーケットで大売出しの鳥肉。
女５　（凄まじい早口で）あんたは朝、起きて、朝御飯用の錠剤を三粒飲んで会社に行く。十二時になると昼御飯用の錠剤を三粒飲んでパチンコをする。五時になると会社を出て、七時には安アパートで夕食用の錠剤を五粒飲み、ＴＶを見て、夜十一時には夜食用の錠剤を一粒飲んで寝るだけの去勢牛。
女３　その癖、きれいな女が通るとポカンと見とれ、だのに通勤電車の中で痴漢になるだけの元気もない老いぼれの馬肉。
女５　あんたは逆らわない。きゃんきゃんと吠えてみることさえしない。いつも他人の顔色をうかがって、右向いちゃ、ワン。左向いちゃ、ワン。尻尾を振ってみせるだけの犬の肉。

男８　（哀れっぽく）助けてくれ。
男５　（哀れっぽく）あんた、誰なんだ？
男８　何のために、こんなことするんだ？
男５　ここから出してくれ。
女３　閉じこめられて一ト月にもなるのに、あんたが喋る言葉は、四つだけ。助けてくれ、あんた、誰なんだ？　何のために、こんなことをするんだ？　ここから出してくれ。うんざりするわ。
女５　答えてあげるわ。私は、あんたを助けようとしてる。
女３　私は、力よ。
女５　あんたの眼を覚まさせようとして、こんなことをしてるのよ。
女３　ここから出してあげてもいいわ。
女５　あんたが、食べるんならね。
女３　あんたが、食べるんならよ。

男５、８、食べるという言葉を聞いて震えだす。女３・５、哄笑する。

女３　臆病な山羊頭！　食べるって言葉が、そんなに怖ろしいの？
男８　禁じられた言葉だ。
女５　そうよ。使ったことがわかれば監獄だわ。
男５　懲役八年だ。市民権剥奪だ。
女３　安心なさい。ここは壁の中よ。外から見れば何の変哲もない、ただのアパート。
女５　その一部屋で、こんな出来事が起きてるなんて、誰も思わないわ。
女３　私は行きずりのあんたを連れ込んで、鱈腹食わせてあげようとしているだけ。
女５　食べたいんでしょう。ねぇ、食べたくて食べたくて、たまらないんでしょう。
女３　だったら食べなさい。
男５・８　食いたくない！
女５　なぜ？
男５　食ったら死刑だ。
女３　食ったら死刑じゃないわ。食ったことがバレたら、よ。
女５　私、バしたりしないわ。だって私、食わせたいんだもの。私の作った手料理を食べさせて食べたいんだもの。
女３　あんたと一緒にね。一人で食べるのはつまらないわ。
女５　食べればここから出られるのよ。腹いっぱい食べて、顔色は艶々として、満腹に眠気を誘われて、ほとんど夢見心地のいい気持。
女３　そんなことが、あんたのつまらない人生の内にも何度かあったでしょう。思い出してごらん。

女5　あんたの口は喋るためにだけ、あるんじゃないのよ。
女3　あんたの口は食べるためにあるのよ。
男5　食えない！
女5　なぜ？

いきなり時計が鳴り出す。
十二時を告げる。
男5、平然として立上り、

男5　ほどいてくれ。
女5　そうね。
男5　そろそろ寝ないと、明日が辛い。
女5　そうね。

女5、男5の鎖や貝かくしをほどきはじめる。

女5　私は御飯を作るのが生甲斐で、あんたは私の御飯を食べるのが生甲斐で、作って食べて、そうやってつながってきたのにね。
男5　仕方ないさ。新しい食べ物ができちまったんだから。
女5　朝三錠、昼三錠、夜五錠、夜食一錠の食事！
男5　おまえの不満は、わかるさ。だからこうやって毎晩々々つき合ってるじゃないか。
女5　ねえ、食べてよ。
男5　刑務所だ。もう寝るぞ。
女5　先に寝て頂載。
男5　食うなよ。

男5、去る。
女5、座り込むと頭をかかえる。
と、それまで静止していた女3が口を開き、

女3　今夜も食べなかったのね。
男8　ああ。
女3　食べれば、ここから出て行かれるのに意気地なし。あんた帰りたいんでしょう。
男8　あんたの、くり返しの目常の中に戻って行きたいんでしょう？　簡単なことよ。食いたくない。

女3　まあ、いいわ。出て行かれないのは、私の方じゃなくて、あんたの方なんだから。

男8　だから食わないんだ。

女3　どういうこと？

男8　ここにいたい。食わなければここにいられる。そうだろう。

女3　……そうね。

男8　俺、明日もまた食わないよ。あさっても食わない。おやすみ。

四つん這いで去る。

女5　私、ときどき、あんたを殺したくなるわ。私が作ってあんたが食べて、もう一度そうやって、それができたら、あとはどうだっていいのに、あんたは、たかだかゲームでつながって滴足してる。私、あんたを憎みはじめてる。

女3　おどおどと、あたりをうかがうだけの様子に我慢できなくて連れ込んだ男なのにね。私は、あんたの名前も年も何も知らないのにね。でも、あんたは食わなくて、だからつながってしまっている。私、あんたを好きになりはじめてる。

女5　いつまで、こんなゲームをつづけるつもり、つづければつづける程、私、あんたから遠くなるだけなのに。

女3　いつまで、こんなゲームをつづけるつもり。つづければつづける程、私、あんたに近づいてしまうのに。

女3、女5、去る。

4

男1が、見えない<食べ物>を激しく食べながら現われる。
男2が、見えない<食べ物>を激しく食べながら現われる。
男3が、見えない<食べ物>を激しく食べながら現われる。
男4が、見えない<食べ物>を激しく食べながら現われる。
男5が、見えない<食べ物>を激しく食べながら現われる。
男6が、見えない<食べ物>を激しく食べながら現われる。
男7が、見えない<食べ物>を激しく食べながら現われる。
男8が、見えない<食べ物>を激しく食べながら現われる。
男たち、食べている。
咀嚼音がする。
嚥下音がする。

男たち、右手の＜食べ物＞を食い、いきなり首を振って左手の＜食べ物＞を食う。
男たちは、みな同じ＜食べ物＞を食べているようだ。
しばらくして、

男１　なんです？
男２　ホットドッグです。

男たち、食べる。

男１　なんです？
男３　ニギリメシ。

男たち、食べる。

男１　なんです？
男４　ケンタッキー・フライド・チキン。

男たち、食べる。

男１　なんです？
男５　マクドナルド・ハンバーガー。

男たち、食べる。

男１　なんです？
男６　稲荷寿司。

男たち、食べる。

男１　なんです？
男７　フラソクフルト・ソーセージ。

男たち、食べる。

男１　なんです？

男8　茹卵。

男たち、食べる。

男2　なんです？

男1　西瓜。

男たち、食べる。

しばらくして、

男1　「恥かしいことだが、また意地汚い食欲が出始めた」。

クヌート・ハムスンの「飢え」の一節を呟く。

男2　「やがて、そいつは内部からこみ上げて来て愈々猛烈になった」。

男3　「そして容赦なく僕の胸を噛んだ。胸の中には人知れぬ不思議な働きが行はれてゐた」。

男4　「何でも二十疋ばかりの、歯をもった小さな虫がゐて、」

男5　「先づ一方に頭を向けて少し胸の内側を噛る、」

男6　「すると次には向きをかへて、もう一方を少し噛る」

男7　「ちょっと休んでは、又始める。音も立てず、急ぎもしないで、穴をあけて行く」。

男8　「そしてその虫共が這ひずりまはった跡には、皆溝が堀れてゐるのだった」。

男たち、飢えを語りながら、食べ、一人、また一人と去って行き、男6だけが残る。

男6、唐突に、もがき出し、

男6　「僕は骨を一本、貰った。それは何の味もしなかった。骨からは胸のわるくなる古い血の臭気がした。僕はすぐ嘔吐（もど）したが、懲りずにもう一度やってみた。それを堪へることが出来れば、飢ゑを凌ぐだけの効果はあるのだ。ただ腹の中に落着かせればいい。けれども又吐いた」。

不意に切り穴の蓋がバタンと開き、舞台のあちこちから、上半身裸体の女たちがゆっくりと現われる。

女たちの腰から下は切り穴に隠され、女たちは、飢えた男を誘う茸のよう

に揺れている。
男6、それを無視して、

男6　「僕は腹を立てて、烈しく肉に噛みつき、少しばかり喰い切って無理矢理に飲み込んでみた」
女1　食べて。
男6　「けれどもそんなことをしたとて駄目だった」。
女2　食べて。
男6　「肉が胃の中で温まるや否や、すぐ又嘔吐してしまった」。
女3　食べて。
男6　「僕は両手を握り締めて、絶望に泣き」。
女4　食べて。
男6　「憑物でもしたやうにばりばり骨を噛り取った」。
女5　食べて。
男6　「骨が涙に濡れて、汚れる程泣いた」。
女6　食べて。
男6　「吐いた、呪った、歯噛みをした」。
女7　食べて。
男6　「胸も張り裂ける程泣いた」。
女8　食べて。
男6　「そして大きな声で、世界のあらゆる力を呪った」。
女9　食べて。

男6、もがきながら去る。

女1　食べて（指をくわえる）。
女2　食べて（舌を舐める）。
女3　食べて（髪をかき乱す）。
女4　食べて（乳房をかかえる）。
女5　食べて（指で唇を撫でる）。
女6　食べて（首を振る）。
女7　食べて（笑う）。
女8　食べて（目かくしをする）。
女9　食べて（体を震わせる）。

女たち、うっとりと、

女1　私を食べて。
女2　私の肉を食べて。
女3　私の骨を食べて。
女4　私の血を食べて。
女5　私の髪を食べて。
女6　私の爪を食べて。
女7　私の皮膚を食べて。
女8　食べて。
女9　食べて。

女たち、揺れる。

女1　あんたの口。
女2　あんたの歯。
女3　あんたの舌。
女4　あんたののど。
女5　あんたの食道。
女6　あんたの胃袋。
女7　あんたの小腸。
女8　あんたの大腸。
女9　あんたの十二指腸。
女1　私の仮の、すみか。
女2　あんたは、かじる。
女3　あんたは、味わう。
女4　あんたは、飲み込む。
女5　あんたの食道を降りて行く、私。
女6　あんたの胃袋に溜まる、私。
女7　あんたの小腸にこびりつく、私。
女8　あんたの大腸に動かされる、私。
女9　あんたの十二指腸の襞の、私。
女1　そうして排泄される、私。
女2　そうして土に混る、私。
女3　そうして肥料になる、私。
女4　そうして食べ物を育てる、私。
女5　そうして食べ物になる、私。

女6　そうして食べられる、私。
女7　そうして食べられたい、私。
女8　そうしてくりかえされる、私。
女9　そうしてくりかえされる、私、
女たち　私を食べて。

女たち、切り穴に入って行き、蓋がしまる。

5

上手から男1が、下手から男2が現われる。

男1　御無沙汰しております。
男2　いやいや私の方こそ。

男1・2、馬鹿丁寧に挨拶し、間。

男1　どちらへ、お出かけに？
男2　ええ、まあ、ちょっと。あなたは？
男1　ちょっと、その辺に、ね。

男1・2、意味もなく笑い合い、間。

男1　最近、御研究の方は？
男2　ちょぼちょぽと、やっております。
男1　確か、でんでん虫の性生活について、でしたね。

男2、急に勢いこんで、

男2　そうです。でんでん虫、またはマイマイツブロ、いわゆるカタツムリです。既にマルチネンゴ伯爵夫人によって、『デデムシ出い出い』という歌が、世界各国、イングランド、スコットランド、ドイツ、フランス、トスカナ、ルーマニア、ロシアおよび支那の子供たちに歌われつづけていることが保証されている、あの、デデムシですよ。
男1　デデムシ出い、出いですか？
男2　デデムシ出い出い、です。

男1　私は、子供の頃、でんでんムシムシ、かたつむり、と歌いました。

男1、歌う。

男1　でんでん、ムシムシ、かたつむり
おまえの頭は、どこにある
角出せ、槍出せ、頭、出せ
男2　それだけじゃ、ありませんよ。

男2、咳払いすると、早口で熱っぽく、

男2　例えば広島県印南郡では「でんでん虫出やれ、出な、尻にヤイトすよ」という歌があり、和歌山県では、田辺附近に「でんでん虫虫、出にゃ、尻つめろ」があります。岡山では「でんでんでんの虫、出んと、尻、打っ切るぞ」。伊勢は「でんでこない、出やっせ、太鼓のぶちと替へてやろ」です。能登は、「でんでんがらぼ、ちゃっと出て見され、わがうちゃ、焼ける」か、または「つのらいもうらい、角を出さねば、かっつぶす」でしょう。更にまた、信州では、「だいろだいろ、角出せ、だいろだいろ」もしくは「だいろだいろ、を出せ、角、出さなけりゃ、向うの山へもって行って、首ちょんぎるぞ」、甲府では、「だいろだいろ、角、出せ、角を出さぬと代官様に言うぞ」、新潟では、「だいろうだいろう、角を出せ、おぬしが出せば、俺も出す」となります。青森県では、「つのだしつのだし、角を出さねば、家、ぶっこわす」が普通です。

男1、男2の長広舌の間、貧乏ゆすりをしているが、次第にそれが激しくなる。男2は、話の途中から、貧乏ゆすりがうつってくる。二人、地震のさなかに話しこんでいるようだ。

男1、男2の話が終ると、ピタッと貧乏ゆすりを止め、

男1　さすがですなあ。
男2　いや、それ程でも。
男1　御謙遜を。
男2　私、時間が余っているものですから。
男1　まったく、正しい法律です。
男2　人類誕生以来、最もすぐれた法律でしょう。
男1　食べることのわずらわしさから解放されて、実にもってすがすがしい。
男2　こっちの国では、食料事情が悪くて、飢え死に、こっちの国では、食料が余っ

て捨てたり、つぶしたり。

男１　そんな不平等もなくなって、万万才。

男２　おまけに時間がふえて、研究ができる。

二人、笑う。間。

男２　ところで、そちらは？

男１　私はタコです。

男２　タ・コ？

男１　ええ。

男２　タコというと、あの足の十本ある……？

男１　タコは八本です。十本はイカです。

絶叫し、貧乏ゆすりする。

男２、貧乏ゆすりがうつる。

男１　私が愛しているのは、タコです。タコ……、頭足類二鰓亜綱八腕目の軟体動物。体は頭、癌、胴の三部分から成る。腕は八本で口のまわりに生え、各腕には吸盤がある。頭の両側に眼があり、腹側に水を噴きだす漏斗がある。墨汁嚢を持ち、水中に煙幕のように拡がる墨を噴いて敵から逃げる。全体は紫褐色または灰色のものが多く、煮ると赤くなる。

男１、うっとりと話す。

男２は、身ぶりでタコの姿を描いている。

男１　私は、タコを飼っているんですよ。名前はジョセフィーヌと言います。まだ、ほんの子供ですがね、可愛いいじゃありませんか。八本の腕を私に巻きつけて甘えるんです。

男２　（負けじと）私は、でんでん虫ですよ。一ダースのでんでん虫が体の上を這う快感。

男１　タコの吸盤にせっぷんする興奮を、あんた知らんでしょう。

男２　でんでん虫が這ったあとには、銀色のねっとりした道がのこるんです。うー、たまらん。

男１・２、口々言いつのる。

男７が、こっそり現われると、

男7　ちょっとお客さん。
男2　でんでん虫。
男7　ちょっと。
男1　タコ。
男7　あるんですよ。でんでん虫もタコもあるんです。って言うより今日はタコとでんでん虫っきゃないんですがね。どうです？

男1・2、訳がわからず、

男1　どうって、何が？
男7　でんでん虫ですよ、タコです。来ませんか？
男2　そりゃあ私は、でんでん虫が好きだ。だからと言って、見も知らぬ人の家に行って、その人が飼ってるでんでん虫に惚れてしまったら、どうする？　みじめだ。余りにみじめだ。
男1　それにですよ、私にはもうジョセフィーヌがいるんです。八本の腕にリボンを結んだタコ。私には、彼女を裏切るなんてことは、できません。
男7　（ボソッと）うまいですよ。

男1・2、硬直する。

男7　でんでん虫、つまりエスカルゴ。これはもう、にんにくバターで、じっくり焼きます。フツフツと煮えたエスカルゴの肉を、こんがり焼いたフランスパンに乗せて……、よだれだ。

男2、うつろな眼になり、ポカンと口を開ける。

男7　タコ、こいつはお好み次第だ。刺身でよし、酢の物でよし、ゆったりと煮て、おでん、バターイタメで、粒こしょうをパラパラとふるか、オリーブ油にまぶしてマリネもいい。

男1、うつろな眼になり、ポカンと口を開ける。

男7　（男2に）でんでん虫ですよ（囁く）。
男1　ああ……。
男7　（男1に）タコですよ（囁く）。

男2　ジョセフィーヌ……。
男7　（男2に）でんでん虫が一ダース。
男2　にんにくバター。
男7　（男1に）タコが一匹。
男1　刺身。
男7　今日の特別料理ですよ。ついてきて下さい。

先に立って歩き出す。
男1・2、フラフラとついて行く。
舞台、無人となる。

6

女8と女9がテーブルを押して現われる。そのあとから、女7が椅子を二つ持ってついてくる。
女7、椅子を置くと去り、女8と9は椅子に座り、テーブル上の新聞と本を読みはじめる。
女たちの動きは、ひどくゆっくりしていて、時間が今にもとまってしまいそうだ。
女7が去ると、不意に女8が哄笑する。

女9　どうしたの？

女8、新聞記事を音読する。

女8　保健所の発表によると、一昨日の深夜、会社員山田一郎と田中政夫は、でんでん虫とタコを食べて死亡。でんでん虫とタコを食べさせたレストランが摘発され、レストランの従業員中村太郎の自供によると、でんでん虫は田中政夫の家から、タコは山田一郎の家から盗み出したものであり、田中と山田は、可愛いがっていたでんでん虫とタコを、そうとは知らずに食べたショックで急死したものと思われる。中村は、「あの二人が、でんでん虫とタコの飼い主とは知りませんでした。悪いことはできないものですね」と反省している。

女9　情けない喜劇ね。笑うのもくたびれるわ。

女7が、スープ皿の乗った盆を持って現われ、皿をテーブルの上に置く。

女7　御食事が出来ました。
女8　今日は何？
女7　まずコンソメでございます。

女7、一礼して去る。

女8・9　いただきます。

スプーンを口に運ぶが皿の中は、からっぽである、
女8・9無言で食べる。食べつづける。
やがて、女8、スプーンをおくと、

女8　まあ、こんなもんでしょうね。
女9　そうね。

女7、からっぽの皿を持って現われると、置く。

女9　なに？
女7　エクルヴィスのサラダでございます。

女8と9、フォークとナイフを握りしめ、食べる。

女7　エクルヴィスは霞ヶ浦で養殖しているアメリカザリガニを使いました。買ってきてから三日の間、水道の水を流しっ放しにして泥臭さを抜きます。そうして、使う前には必ず背ワタを取ります。尻尾が三つに分かれていますから、真中の部分をひねりながら引っ張りますと背ワタがついてきます。こうして背ワタを取ったエクルヴィスは、一。三、四分ボイルした上で。二。頭をむしりとり。三。甲羅の一番上の一ト節を外して。四。尻のところを押すと。五。中身が出てくるので。六。それを使用します。

女8と9、食べ終る。

女8　ごちそうさま。
女9　次は？

女7、皿を取り上げると、又、置き、

女7　鹿の肉のステーキでございます。

女8・9、食べはじめる。

女7　一ト晩、赤葡萄酒と玉葱、人参をまぜたものに漬け込んでから焼きました。

女8　苦労の味がして、とても結構よ。

女7　ソースの中のコロコロした小さな果実、これはスグリです。

女9　これね。

フォークを突き出してから、食べる。

女7　それから、つけあわせのマッシュポテトには芋セロリとジャガイモを使いました。

女8と9、一心不乱に食べる。

女7、次第に早口で、

女7　次は平目の蒸煮、シャンパンソースでございます。つまり平目をシャンパンで煮て、その煮汁でソースを作り、そのソースを平目にかけて食べようというのが大体の方針であります。まず平目を五枚におろし、頭と骨を適当にぶった切って、玉葱の薄切りとシャンピニオンの軸と一緒にバターでいためます。次にシャンパンを抜きます。今日は八五〇〇円の、ランソンの、ブリュットの、赤ラベルを使いました。八五〇〇円の、ランソンの、ブリュットの、赤ラベルをダシの中にドクドクと入れます。それからパセリ一束の茎を引きちぎって、その茎を大胆に入れます。次にローリエを少し、タイムを少し、そこへひたひたの水を入れて沸騰させ、煮つめ、シャンパン・ソースのでき上り、という訳です。

女8と9、フォークとナイフを置き、満足の溜息。

女8・9　ごちそうさま。

女7　私、おなかいっぱいよ。

女8・9、いきなり立上ると、

女8・9　はい奥様。

女7　コンソメ・スープにエクルヴィスのサラダ、鹿の肉のステーキに平目の蒸煮シャンパンソースだもの。
女8・9　はい、奥様。

女7、椅子に座りながら、

女7　肩を揉んでちょうだい。食べすぎて疲れたわ。
女8　はい、奥様。
女7　それから、あんたは、きのうのつづきを読んでちょうだい。
女9　はい、奥様。

女8は、肩を揉み、女9は、本を読みはじめる。

女9　「一本の木がある。広々とした野原。垣根にそって、紫色のジギタリスの花が咲き乱れている。マリーが裸で寝そべっている。真っ白い肉体の上に黒い三角形が浮かび上っている。わずかに開いている太腿の間にけむる黒い繁み。少し肌寒い。マリーはいかにも楽しそうに笑い、その笑い声がミッシェルの耳のなかで木霊となって反響する。手がマリーのふくよかな腹に向かって進んで行く。その手はミッシェルの手だ。生気みなぎる温かい肉体の上に、手はとまる。ただ、ただ、静謐……。ピエール・クリスタン」。

女7、うっとりと聞いている。しばらくして、

女7　ああ、いいわね。とてもいいわ。言葉のセックス、言葉の食事、満足よ。おなかいっぱい。
女8・9　はい、奥様。

間。
そして、女たち、はじけるように笑い出し、

女7　やったね。
女8　最高。
女9　明日は、あたしが奥様だからね。
女7　明日にそなえて今日も寝よう。
女8・9　はい、奥様。

三人、笑いながら、馳け去って行く。

7

女4・6が臨月間近い妊婦のような腹をなでさすりながら現われると、椅子に座り、ふうっと溜息をつく。

女4　だめだめだめ、動いている、動いている、動いている、おなかが、おなかが、おなかが、なんでこんなに苦しめるの？　愛している、愛しているのよ、さあ、もっと愛してあげるから、もっと、もっと、もっと、もっと。

女4、しきりと腹を撫でまわす。

女6　なぜなぜなぜなぜ、壊れる、壊れる、壊れる、おまえは愛していないのね、あたしを愛してないのね、こんなに待っているのに、それなのにそれなのに、出てきておくれ、お願い。

女6、しきりと腹を撫でまわす。
女4・6、身もだえるように体をゆすって、

女4・6　おぎゃあおぎゃあおぎゃあおぎゃあ、もうすぐ出てくる、もうすぐ、きっと可愛いい、可愛いい、可愛いい、可愛いい、おぎゃあおぎゃあおぎゃあ、なぜ、こんなに苦しめるの？　出ておいで早く、早く、早く、早く、待っているのよ。待っているの。

女4、不意に醒めて、舌打ちし、

女4　まだ、だわ。

女6、誘われて醒め、あくびし、

女6　腹が立つ。
女4　ねぇ。
女6　なに？
女4　あんた、産んだら、どうする？
女6　また、作るわよ。

女４　元気ねぇ。
女６　だって幸福ってもんじゃないの。
女４　幸福？（肩をすくめる）
女６　馬鹿にしたわけね。
女４　幸福なんて、世の中が変ってから、文字通り血を吸いつくされた言葉じゃないの。食えなくなってからってもの、言葉の世界を襲撃した意味論的大出血のために貧血状態におちいった言葉だわ。
女６　じゃああんたは幸福じゃなかった訳？　幸福じゃなかったと言いきれる訳？
女４　自作自演の、この大ドラマをよ。
女６　楽しんできたのよ。
女４　つまりは幸福だったのよ。似たようなもんだわ。
女６　楽しみなんだと言わせてよ。
女４　御勝手に。
女６　私、三十よ。
女４　だから？
女６　あんた、二十五よ。
女４　だから？
女６　二十五で言える言葉が三十では言えないのが人生の現実よ。楽しみと言いきるのがいきがりよ、三十の。
女４　ご自由に。
女６　ガキ。
女６　年増。

女４・６、睨み合うが、

女６　やめようよ。
女４　そうね。
女６　（突然）母体に宿った赤ちゃんは一〇ヵ月の間に、見事に人間としての生命の発育をとげていきます。しかし、それは赤ちゃん一人の力だけで発育するのではなく、母体をよりどころにしているのです。したがってお母さんは、自分の健康や病気のことはもちろん、日常のすごし方、心のもち方、性生活、その他くらしのすべてのことに対し、心を新たにして、やがて訪れる出産の日にそなえなければなりません。
女４　台所の仕事では、まず流し台の高さを適当にしなければなりません。一般家庭の流し台は高すぎることはまれで、低い場合が多いようです。流し台が低すぎて、前かがみの姿勢で炊事をすると、疲れやすく、母胎に負担がかかります。

流し台に向かう姿勢としては、両足を揃えて正面から向かうより、片方の足を少し前に出して、やや半身に構えた方が楽であることも知っておいて下さい。

女６　ふつうの場合でも栄養をとることは大事なことですが、妊娠するとからだに色々な変化が起きますので、それに合った栄養補給をしなければなりません。

女４　まず考えなければならないことは、自分自身と赤ちゃんの二人分の栄養をとらなければならないということです。

女６　さらに赤ちゃんは、母親を通してとった栄養分の不要物を母親に返していますので、

女４　母親のからだでは、ふつうのときに営まれていた新陳代謝のほかに、赤ちゃんの代謝も行われるようになります。したがって、その分の特殊な栄養が必要になってきます。

女６　たん白質は、血や肉など、からだ全体の組織をつくるのに欠かすことのできない栄養素です。

女４　ふつうの場合の、二十代三十代の女性のたんぱく質の必要量は一日六〇グラムとなっていますが、妊娠すると八〇グラムが必要になります。

女６　カルシュウムは胎児や赤ちゃんの骨格や歯をつくるうえで、絶対に必要な成分です。

女４　妊娠していない女性の、〇・六グラムよりも六〇％～七〇％多い、一・〇グラムはとらなければなりません。

女６　鉄分は、赤血球の中の血色素をつくるのに大切な成分です。

女４　とくに妊娠後期は、赤ちゃんが沢山の鉄分を欲しがっていますので、ふだんの十五ミリグラムより五ミリグラムふやし、二〇〇ミリグラムをとるようにします。

女６　ビタミンＡの不足は、赤ちゃんの皮膚疾患や視力障害、抵抗力の低下をきたしますので、ふだんの二〇〇〇Ｉ・ｕよりも多く、妊娠前期に二二〇〇Ｉ・ｕ、後期に二四〇〇Ｉ・ｕが必要です。

女４　ビタミンＢ１の不足は赤ちゃんの発育を妨げることになります。ふつうは一ミリグラム程度でいいのですが、妊娠中は一・二ミリグラムにふやします。

間。

そして女４・６、「アッ」と呻くと、体を震わせる。

女４　そうね、これね。

女６　そうよ、これよ。

女４　痛み、ね。

女６　痛み、よ。

女4　痛い……わね。
女6　痛い……わよ。

間。

それから女4・6、次第に痙攣し、

女4・6　おぎゃあおぎゃあおぎゃあおぎゃあ、出て行く、ちぎれる、おぎゃあおぎゃあおぎゃあおぎゃあ、あたしに宿った、いとしい子、あたしはあんたを愛しているのよ。だから、あんたはあたしを愛して頂戴。いとしい子、いとしい子、いとしい子。

突然、産声が空間を満たす。
女4・6、衣装の腹部から、ボロ布に包まれたセルロイドのキューピー人形をとり出す。
キューピー人形は蛍光塗料を塗られて発光している。
女4・6、人形を撫でさする。
音楽が流れ込んでくる。永六輔作詞・中村八大作曲の「こんにちは、赤ちゃん」である。
女4・6、いきなりキューピー人形にかぶりつく、食べる。
と、切り穴が開いて、男4が、びっくり箱のピエロのように上半身をのぞかせ、

男4　ちゃんと育てられた健康な子供は、一歳のときが、極めて美味で滋養にとみ、上等な食べ物で、シチューによく、焙ってよく、焼いてよく、煮てよいものである。

男4が引っ込むと、男3が別の切り穴から現われ、

男3　我が国では、一年に十二万の赤児が生まれてくる。そこでその内の二万人を繁殖に残す。男の子供は二万人中、四分の一の五千人でいい。これでも、羊、黒牛、豚の場合より、率がいい。

男4引っ込むと、男5がまた別の切り穴から現われる。

男5　というわけは、これらの子供は、結婚の所産であることは滅多にないからであるが、わが未開人にとっては結婚なんぞ少しも重要視すべき事柄ではないから、

男一人で女四人を充分相手にすることができよう。

男5引っ込むと、男1が別の切り穴から現われる。

男1　母親には、たっぷりと乳を飲ませて、子供が立派な献立に向くよう、丸々と肥らせる。友人に御馳走するときは、子供一人で二品できる。家族だけの食事であれば、頭や尻の四分の一だけで、かなりの料理になる。少量の胡椒か塩で味つけし、四日目に茹でると、おおいによろしい。冬は、やはり鍋料理がいいだろう。

男1引っ込むと、男3が現われる。

男3　子供の肉は一年中が、しゅんであるが三月とその前後が比較的多い。

男3引っ込むと、男4が現われる。

男4　検約家は、赤児の死体の皮を剥ぐべきである。この皮を加工すると、見事な紳士用皮靴ができあがる。

男4引っ込むと、男5が現われる。

男5　子供は生きているのを買い、殺したてを料理するのが一番である。

男5引っ込むと、男1が現われる。

男1　何よりもまず、子供を作るべきである。その方法については、それぞれの知識と判断におまかせしたい。

女4・6は、切り穴の男たちが話している間に、キューピー人形を食べながら去り、男1は切り穴に引っ込んで行く。

8

女1が乗った車椅子を押して男2が現われる。

女1　あなたは誰？

男２　無数のものだ。
女１　あなたは何なの？
男２　退屈な質問だ。
女１　あなたの名前は？
男２　混沌だ。
女１　あなたは何なの？
男２　くたばりやがれ。
女１　あなたは誰？
男２　いる者だ。
女１　あなたは何なの？
男２　俺はグラスヤラボスだ。それが俺の名前だ。犬の歯をした、翼を持った男だ。俺は口から泡を吹く。永遠に口から泡を吹くように運命づけられている男だ。
女１　そうね、そう言ったわ。
男２　（うんざりして）象の鼻が、そう言ったんだね。
女１　ええ、兄さん。あの人は言ったのよ。どこか暗いところに蜘蛛の巣をかけた、ってね。そこでは蜘蛛の巣に引っかけられた食べ物が、生きたまま、ぐるぐる巻きにされているの。またおなかがすくまで、生かしてあるんだわ、どこか暗い場所で、巨大な蜘蛛の巣が静かに揺れていて、百の千のごちそうが、ぶら下っているのよ。新鮮さを保つためと食べやすくするために、ひとつずつパッケージに包まれて、ぶら下がっているんだわ。

男２、車椅子を押して、ぐるぐると歩きまわっているが、やがてとめる。

女１　象の鼻は、ときどきくるわ。私のところに、くる。そうして、私を食べる。私の顔に食いついて中身を食べる。私の目に喰いついて、私がまばたきをする間に眼球を食べる。

女１、うっとりと語る。
男２、女１の背後に立ち、ゆっくりと首に手をのばすが触れることができない。

女１　（何も気ずかず）それから私の口に食いついて、舌を根元から引っこぬいて、歯茎を剥ぎとって、脳味噌を貧り食つて体中の血を飲み尽すの。ほんのわずかな時間で私の中身をぜんぶ食べてしまうのよ。

女１、笑う。

男2、首をしめようと試み、だが、できない。

女1　いつか、本当にからっぽになったら、なってしまったら、私、どこか暗い場所に行くのよ。蜘蛛の巣に引っかかった、生きたままの御馳走を食べに行くのよ。

男2　……ねぇ、兄さん？

女1　……なんだ？

男2　あの人、まだ？

女1　まだだよ……象の鼻は、まだ来ないよ。

女1　眠くなったわ。

女1、眠ってしまう。

男2、車椅子を押し、

男2　全面的に気違いになってくれると有難いんだがね……、そりゃあ、おまえが、狂ったり醒めたりするような出来事に出会ったことは知っているさ。十のおまえがチョコレート欲しさに象の鼻のあとをついて行き、強姦されたことは、ね。だが、もう昔話だ。それに第一、チョコレートなどと言うものは、この世に存在しないんだから、欲しがる必要もないんだよ。もう腹も減らないし、飢えもしないんだ。いい加減に、象の鼻の悪夢から、さめてくれないかね？

男2、車椅子を押して去る。

9

女2と男3がテーブルを押して現われると、卓上の籠と椅子をおろし、向い合ってすわると遊戯の用意をし、卓上に一体のキューピー人形を立てる。人形の足には糸がついている。その糸をたぐりよせて、人形を引っぱりながら、

男3　ほぅら、こいこい。ころぶなよ。よしよし、あんよは、上手、ころぶはおへた、だぞ。

人形が引きよせられると、

男3　おまえの番だ。

女2　そうね。

糸を引くが、途中で苛立って強く引っ張るので、キューピー人形は倒れてしまう。男3、笑って、

男3　残念でした。

叫ぶと人形を立て直し、真剣な表情で糸を引きはじめる。。
女2、しばらくそれを見ているが、耐えられなくなって、力まかせに自分の糸を引く。人形が倒れる。

女2　もう、うんざり。
男3　きついことを言わんでくれ。
女2　言葉だけよ。心はマシュマロ。
男3　やめろ。
女2　心はキャンデー、心はキャラメル。
男3　俺はキムチだ。

男3、人形を立て直して糸を引く。
女2、それを眺め、

女2　マシュマロだから、うまく悲しめないんだわ。……ねぇ、話さない？
男3　何を？
女2　昔のこと。
男3　話し尽した。
女2　何度話したっていいじゃないの。もう言葉でしかつながることができないんだから。
男3　きいてるから、話してくれ。
女2　最後の幸せなひととき。……続けて。
男3　（渋々と）眠りの中で空腹を感じてスタンドをつけた。小さな、ものうい光が闇に明るい傷を作った。
女2　どうしたの？　と私が訊いた。どうしたの？
男3　腹が減った、と俺が答えた。腹が減った。それから俺が訊いた。カレーライス、残ってるか？
女2　残ってるわよ。あっためようか？
男3　ああ。
女2　私はベッドを降りた。裸足のあしのうらにリノリュームの床が、ひんやりと冷

たかった。私は裸の体にガウンを引っかけて寝室を出た。

男3　おまえの背中に俺は言った、飯はあっためちゃ駄目たそ。冷たい飯にアツアツのカレー。それが正しいカレーライスだ。おまえは笑い声を残して出て行った。

女2　戻ってきた。

カレーライスを持って戻ってきた。台所は寒かったから、足が冷えていた。私はカレーを渡して、ベッドにもぐりこんだ。あったかい……。

男3　俺は夕飯の残りのカレーを食った。冷たい飯にアツアツのカレーをかけたカレーライス。すると、おまえが言った。

女2　一口ちょうだい。

男3　俺はスプーンをおまえの口に運びカレーを喰わせた。

女2　ベッドのまわりにカレーの匂いがたちこめていた。あんたがカレーを食べ終ると、私たちカレーの匂いのキスをした。

男3　それからカレーの味のセックスをした。

女2　幸福だった。

男3　幸福だった。

間。

男3、相変らずキューピー人形の糸を引いている。

女2、糸を強く引いて人形を倒し、立ち上がる。

男3　地獄のはらわたへ直通電話をかけているようなもんだ。壁に耳あり障子に目あり、隣は何をする人ぞ、だよ。

男3、キューピー人形をとりあげ、撫でまわす。

男3　カレーの話なぞ、しちゃいけないんだ。

女2　話は、もうすんだわ。

女2、籠の中から白布をかけた盆を取り出して卓上に置く。

女2　あとは……、

男3　あとは？

女2　食べるだけ。

女2、白布をとりのぞく。缶詰に缶切り、水の入ったコップが一つ。

男３　……おまえ……。
女２　最後の晩餐よ。

女２、缶詰を切りはじめる。
女２、沈黙の中で缶詰を切り終る。
女２、蓋を開ける。

女２　食べ物よ。
男３　……喰うのか？
女２　鯨の大和煮。
男３　……喰うのか？
女２　生き物の肉だわ。
男３　……喰うのか？
女２　食べて。

女２、ゆっくりと缶詰に手をのばし、指で肉片をつまみ、口に入れ、咀嚼し、嚥下する。

女２　……おいしいわ……。

女２、コップの水を飲む。
男３、缶詰に手をのばす。指で肉片をつまみ、口に入れ、咀嚼し、嚥下する。

男３　うまい……。

男３、コップの水を飲む。
テーブルの周囲が急速に暗くなると、フォークとナイフを手にした人々が現われてくる。
女２・男３、互いを凝視して無言で喰い、笑い、水を飲み続けている。
＜群集＞が二人をとり巻き、「あ」と叫ぶと、

男１　アミノ酸。
全員　い。
女１　イノシン酸ソーダ。
全員　う。

男２　ウノールサラダ油。
全員　え。
女２　塩化ナトリウム。
全員　お。
男３　オキシタイド。
全員　か。
女３　カルシウム。
全員　き。
男４　キノバール酸塩。
全員　く。
女４　グリコーゲン。
全員　け。
男５　ケラノールカロチン。
全員　こ。
女５　香辛料。
全員　さ。
男６　酸化補強剤。
全員　し。
女６　脂肪。
全員　す。
男７　水分。
全員　せ。
女７　接着安定剤。
全員　そ。
男８　ソリューム。
全員　た。
女８　タンパク質。
全員　ち。
男１　調味料。
全員　つ。
女９　ツェニルアラニン化合物。
全員　て。
男２　鉄分。
全員　と。
女１　糖分。
全員　な。

男3　ナスパルテーム。
全員　に。
女2　ニコチン酸。
全員　ぬ。
男4　ヌル系甘味科。
全員　ね。
女3　ネクタール糖分。
全員　の。
男5　ノバピリン。
全員　は。
女4　発色剤。
全員　ひ。
男6　ビタミン。
全員　ふ。
女5　粉末塩素。
全員　へ。
男7　ヘノバルビタール。
全員　ほ。
女6　ホノリューム。
全員　ま。
男8　マグネシウム。
全員　み。
女7　ミネラル。
全員　む。
男1　無機質。
全員　め。
女8　メチール。
全員　も。
男2　モノリウム。
全員　や。
女9　ヤニバール製剤。
全員　ゆ。
男3　油脂。
全員　よ。
女1　ヨートル酸化剤。
全員　ら。

男４　ラミコール化合物。
全員　り。
女２　リン酸。
全員　る。
男５　ルジューム性澱粉。
全員　れ。
女３　レタノイドカリューム。
全員　ろ。
男６　ローデン酸化物。
全員　わ。
女４　ワニール剤。

不意に、あたりが静まり、しばらくして、

男３　わ。ワギナ……。
女２　わ。私……。

急激に闇。
その中に、江利チエミの歌う「家へおいでよ」が鳴り響く。